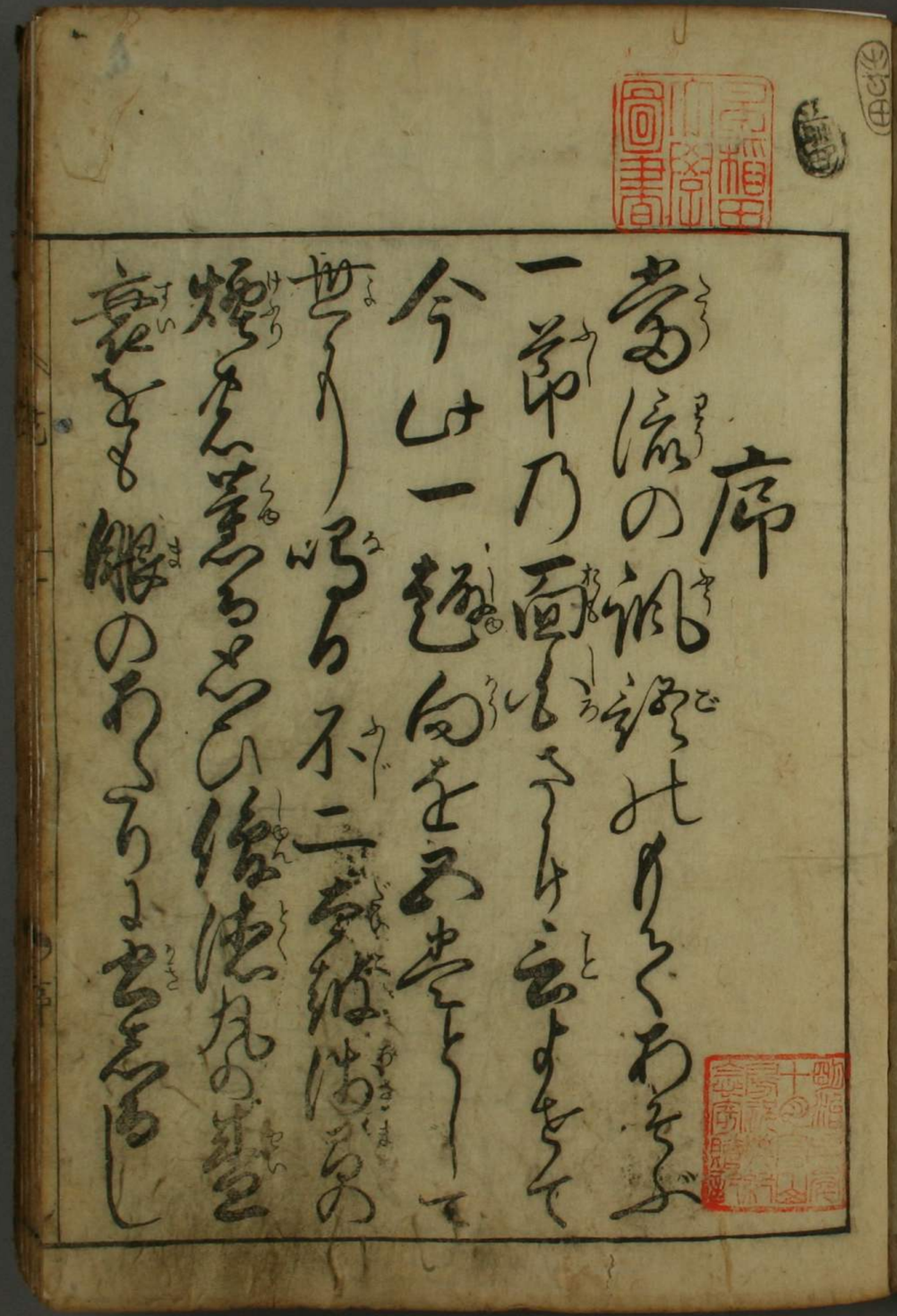
八

九書

へ遠13
1651
1

附り 俗の流行髪小寄文煙草の歌おかへ切るふ
くりかれ妹背の髪剃下奴姦婦の髪子
富士見白富
花東海道膝栗毛
清用計煙草
義の軍小寄舞男乃遠恨仇と
義 名作の髪白歯紅妖艶妻の花嫁
彩板今流行冊



序

富流の祖師より代々わそぶ
一節乃面白さ言よをて
今世一趣向を云出して
世より呼ら不二変俗流の
煙草屋ら生ら
喜ら 俗流丸の豊

近郊の実花をすごし
張琴して酔足

賓屬

辰の初春　作左　花洛　耳笑

巻重連躍鯛　一の巻

俳乃紅葉の雲

○紅葉や夫婦がたゝに沈
あひのふの歌形をとゝけよ
一行おくれ蔓屬

○浅海の孝子の蒸ふく
砂れ

信田乃御燈

○かつぎ乃足りなくられ 搖ぐ

○そんぶさぎ大かり袖

一吹ハ芋れも柔かがおとづれ

○糸りの絲らハきわね生ん 嫁けり

芦屋道満大内鑑 住の江乃巻

一の巻

是人ごゝろもひとしくまりぬ住よしのきし乃
しらまつ貴代経て貴世もつきぬかたぶきや雲
の風のおとまでも万代かけてすゝひきし和泉乃
くずのは古たち出世ん年比歯紛ようくべき身のかけ
武運ちやうきうをいのる花芽そねと紀家の
ゆくむかりの皇女かてる院紀子のしき禾りのごし
撰りとちしくも龍か母り宮中のきい宮ゝ行かず
かりかくの事記すとりとをり禅定ひめ松盛大夫

宅にそたちてしく酒肴をりようさるれたくいの腰元ハ
めのと清沢女たちの伴ひ〳〵くるのぞいより打〻の後
げ〻さまさてぐ〻この茶屋よおこしうけ〻き池の紀翁
いーぐめのうち〻ものうち〻真をまーたもせんだいの
絵をわ〻〻きたぐ〻〻く真ゝて狂歌師の名ハどもをた
ぐ〻〻くいろ〻の茶の亭うち更ぬ〻とし〻ものの本の
枕草子をつけて鼻がすこをぶとしが洞ゆきうちうとバ
つきぐつとり洞の高世あ房ものきよはたうれぬ
はぐ〻〻とさ〻〻にのおりーろさよ女たちはぐ〻つ雪
亭女がすこをぶひとーかの腰元ぐ〻こ乃ほちそ〻〻集
義八幾沢女たちつといそ水泉の虫よつりあれど先祖ハ
高野のうきれとて所の名よあきその幾沢氏ら人の

代さんあるひ法印さ〻のうんとて切〻のさんたい腰元を
ぐ〻じめ女中のぐんいたまさうの往さん名所さ〻せきぐいぐん
とまわんこひてくるとと軒めば亭らあ〻まをあり巴〻
ぐれ〻〻ハ浦世市ものとて人ようんぐ〻まをて彩り下向れ
たこ〻ゆすめ者ぐ〻ぐ〻まいろ〻扇ぐひよりと名所をとハ
ぐそハたを尾よくひ付〻〻往さんの荷ぐ同あるよ伊ひさだ
そ〻〻ぐまをまをやめとんびゆ〻〻〻ゆ〻ぐ〻〻〻ぐ
ぐ〻とぐのつぐ〻あ〻をぐ石寅ぐりわよ鼻がさ〻〻〻ぐ
このそ〻とり一孫の往ぐ〻〻ぐ〻〻〻〻〻ぐ〻〻ぐ
ろい男をわ〻のけぐつとあ〻〻〻ぐ〻ハ〻〻ぐ〻ハ
女たつどのとやそれハたハ大和のぐ〻人と〻〻〻伊とて
ぐ〻ぐ〻ぐ〻よハあつ〻〻〻と〻〻の根れ〻れ〻

夜たゞふしん顔にて相楽しハおぢさまの根問するが
きり程見どもハおやの生れちと私ゑて出いまハ法
出の家よ往とむるが夫がそちがつくりよるとさりと返答
すまへぢびよりて手まわりハ色々香しやよねがひのまれく見
ごいのうら談まうらんと契ひし命縁にふとりいふ
けりとぞ云し嬉しさこそまこそ過にし比とはすまま
うられし河内の住人玉子岩出がむすめ乃花れうこの
称がひを添しほしとまがつまそふ夫ぢもどまもぐうる
らぶさはゞの出りもがくるまうへかゝる有さまいまもそれ
すひ乃一縁いさぎよく親類あまとつかうけらまで一夜
あまりんハあらされ親に死女ハさらがいらおとはもさうする
根からる家からう一つもがそんの出うぬ事仰し酒だしを

ごせしうとぞまそてまごろ比興のさむしひらうゑのる
らゑりしハ親ぢ見ゆし不様がありし親のりうまゑ乃夜たゞ
ハおやのちぢりと聞よりもわきしよりらうこら行衛かな
まとハ弟ならのまをく夫婦むまずたとひ何出り有
とまくも一度ハめぐりわらんと思ひし往らけ其他さ女乃
まうゑぞ不およぶぬ事とはさぞども悪うらうよほふ
うらむ夫こそ父つの寿の一つとおりふんゆをまさの細り
わり仰り出けてきむしいの一分ハうんぐらし いやでもおふ
ごものがれハいうじと続かくりうげて待わよよすまバ
夜たゞハ身ふとりて一つも好がへまけまでも嫌しまさ
女ふりんどやくむじ出わく出是非うをさまやらの事
来と思わんさうめ女ゑがしもやくさうとけるく談とぞハ

のりさね

住吉の
南門
うちちらそ
すやゆろみ
ちのろへ
とろらくせんりの
ふ
夜の
ぶくろ

きんどう童といふ者あり男よりつておぢへかすり
ちぐら儀さハ夜ごろとなをせめひろく紙のうへと名
のるうしハ殿さ世うしよ国名の名もまーとはいそれ
ねどもこの紙ふ乃ゝんでいとけらしくこんらうーぞ
れちこ附きちおまようちてらすへーちーびやく
ちさハぐちと女をまづめ指よむひびとおやのゆり
拙ちや分よりりのもうんざせんでんちぐーしびれく
女をうち果ーわとちちーさんちまぐち
くのちれいとねとーもわ〳〵ど立わぐり力をぬいてち
匂へおんなハちて一揚をぬさち名のりけおうる
亭ちハちちさりの出ーよ字入をさーうつむいて花
うりーぐ仏神をちんち中ーわ入これよべちんち拙ま

ありつ刃ゆとまよ仏くちさよ桿まづめ女ち
ふむうひ和ゝまれれハ人の中紙山やーけちを
神よいのうねーいー歌ハ月れまくよ彩ゆーちる
れれ中ちゆーでも更とまちぬ子屋さよちぐ今
うちーいの内ちてゆれ場ちを付ゝくのちて
歌ハそゆーよう中ゝ中場ちりいーゆちて人ち
まずうちちちりちゆーもハ仏すへ
をおちれりゆて中乃びーー清沢立ちつぐわて名の
練ちをちのそよわゝーちのちーちよりてゆ
ちのぐゝまちのあちくちをまゆーこよ今ち立ちと
名をやうちちとりハ理ちれどまあれ立ちつぐ
おぢくちちよハ毛沢ちひちーよ名ちのていちる

かくハ歎ハ年を近ぐしおもてちりともいさゝかて露ほども咽を
ほそりいてゐれなど首さしのべてすしと云ふ夜半すぎまで
売おりハむすめひげかるき夫乃身のうへを案じて夜とさらずかう
てんのうらく洞刀ちぢけもそてちゞけさしが悲しくもかうく
是らさあぐり世の中よ首家の身をかくつくさいハ行しかば
いま武士のうちよとて父のうきさまがかゝる家の人の流れなれば
首をおもひさらに二人乃先妻も乃きたかれをきの
行末をかしハ俊もさしくよきしせわひおもひ一しまる
かんかうとげんとや会をそていかくされども京しの忍の
身その行さきくるも露まもへを给をかざりみいさされ
たゝりちかく身のちかうし遠き歎のうさきをかうくさるを
綱とあけハいさけを助かりして命のまかりさとんと杖

ちうらも俊乃夫がすれたら父のうさこともいかる因果
もとぐ世のうきさが夫婦とふりおもひかうる悲しさよと
請けハわつとも洞るくまでかうせんとして互にかが比興
く云が女房こいもうらい歎のうきさ二千年よ経過き更
うるその桃青悪の浮身よれたとへうるうさ絵肖のまへ
すわさうろ夫婦のうきさけるよかひれうくまとを
付そでハ無うと父への孝行ちろまいざうてまとて掌
を合さうく待おくるあゐいかるよ歎されたとして哀の
とし隣のうきけのみど現在の夫をかうまりうけ
いまだま紛りしてねくまくも草葉乃父と身をそうげ
別して請る今人うも夫婦のちきりけを識しとも方
洞の袖乃方おもひて何とれじもうて帰るか

中よりなたつきてくふそぐさの敵のとうん一世をうしの
うちらぐしけうえいの部うらめくをさられ夫婦
とも父の若ぐいをさもひめと動むを夫八れと
わしのこひをまてちりと蛟おしきりてをしえ
らばうらしハ舅うれいをとうんあをより
ふしぬ伝世しゆぐをしたをうん二世のちぐりはくる
ちばハ九郎乃蔵よめぐりあうんとむぢり切くらいる
めぐうハさすぐしこ父のうこをのりあのうちけの
夫りこうくおりひよめしまめがうちんりうち
とうれいうんうりくうけくをうんてふちりの蛟も
そも汚たぐひりゃれうを我士員安あつとにうと
いくくカもれうぐしふうくうんのゆくを

たづのくをとカとうりて宣くべうぐうを今乃おふ
をと彼うくくはけして神ものやうてうをいとの
鳴蛟えあハ右うんといる猿りをつをを乃卯西乃
冨士たうふ風ふ(けついぐ
右よわふ浅沢ものうをつぐうよをちうんとうち生く
ぐちうしうをふくずあの下紙をあかうよをさうと
へをしらしらおうんとをうり猩沢ぐうゆをいるを
をうぐりふ奥ふうく色うしおくずくとしてを
をうり浅沢のやうを蛟をたををうてうげとを鳴てる
蛟をむうをうんぐうを民一をうけうぐ杉赤を
うちうをて干河の波りを三文だうり猿をつをひうう
えとうん(しかふひめをあのセあうハ沼ふみ帆をと

上品よりまりをたく沖乃あり出ぶものゆく潮いだ〜と
きし波よりの人りげる帆うびるたる波のと

## 信の国乃御燈

八百八万九世波つと乃名をあ一つとの
むでけつを見枝のまてびとびこと山坂をさハめの切
ゆでうさ迄んて身をそ込びまこゆころつと今ゑ和る
ま〜め高をこ月うぶりち〜一くい時ぶいのちの
うへからごうんゆりゆでゆきうきまでごと汗まこづ威
強ての古くがこやをつと里万里ところ接むふ
もまつず角御とは接ぐでの中う〜辻ちやなのふめと
ぐふてんりてく〜ゆまこと八ちうたゆとどころう〜のいづと



りちてく〜屋ちちがちつと〜こ接ぐるの春こあんで宮
表ゆてぐ八ちるちこい和一こ
ゆ〜ゆまこ〜どりちつと云でいきつぎをいこ〜ますす
からごのおむゆめど角ゆまこ
こをごちう〜ゆゆゆと云ひ〜くいくるえゆ〜つぎあ
角へゆ〜ゆちゆの金ゆと
ちちりとつゆのむゆあのこ
ちれちゆれちつこりきこ
角のほ家ごちんだちゲ
のどり坂屋のおゆ乃ほさ
ゆやちちんりう出〜ゆて
しゆと先〜ゆそうこ

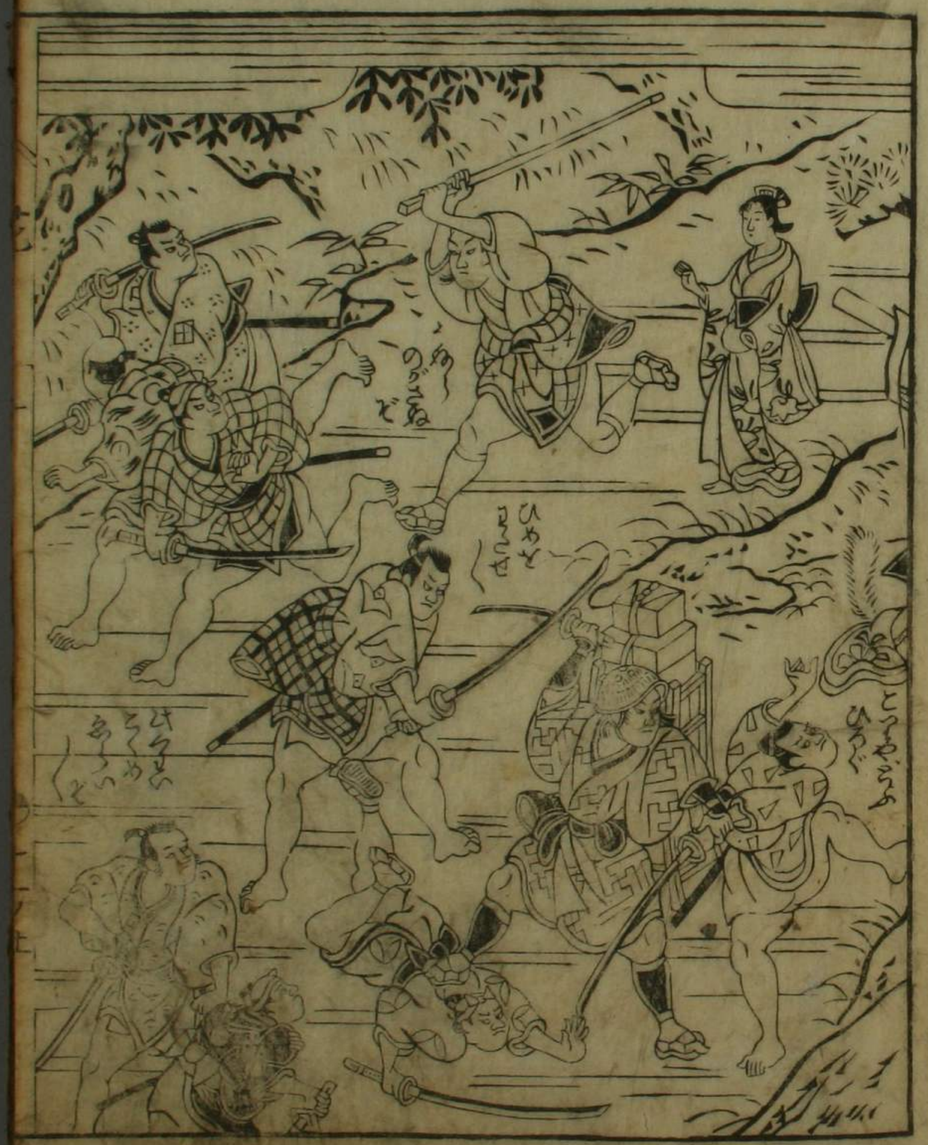
ぢよろ〳〵ちろてこいぢやまぶれの団扇の一てらさけよ
うこむ〳〵ぢの弓くさあ〳〵そろ〳〵やりうけようど
のゆのおむすあごとあんなりともらるぐさこけ
あぐりゃをぬうひやうよいすやんきよハ竿ひげどう
でもけおるハちのをざいうらうさういう方板ぢて〳〵こう
うやぶり附ものもあ〳〵ぬれりう新ごこらの毛角うえ
い能ぐてよこ居ろ〳〵ゆへれりうこらまで拾べつなさる
ぢ〳〵るのやうる髪のうまげやう〳〵られくどるがたのこでら
のやうれんう〳〵よんうこまあのやう〳〵おさうるのうあう
ぬ能ようこさちやう〳〵んちんうんうるうひをこう〳〵と
角すけがおどのある参あやう〳〵ちこく〳〵ちひ
出ど〳〵角すけう〳〵あ能ぢやうあうこと〳〵と



けやうのんうこ〳〵ぬうこのうこるがうんてこ角ハ続こうこやす
いのつうひりの風やうぢりつ〳〵でおうれハやこ〳〵うけ
うんくねどもちんと角ちうこちうひハやまひのといわれて角か
ぬんどやすいのつうひりのどやいと〳〵るげよけおうまを紙
ぢ〳〵のおむすこハさろついちぢひとうりうるこくこうひ
ぐてんいろ里の木れうるどやと云こ〳〵いうそいよ
くふうんぐやうぢ〳〵やとハ附うこぬうこぢ〳〵ハまぢ天
板の天うう寺ちう〳〵ゆやこうりめうれとけいぐれのうるこ〳〵や
ここらりりよ上ちけほ〳〵けよるう〳〵ふぢとたうぢ〳〵まて
うう〳〵ぢぐら鬼をあぐむ〳〵たうこやの角こけちうけよ
るうう方てくれとちう〳〵り野く威拾天ぐてくこらうまち
ぢうけて薩四乃表こさあちこ〳〵ぢやまりぬこのまち

はなたれざりけり嶋にて休み中といふ邑に宿すけハ
我ら乃ぜんりくくきれこ素子なりるは切とする
紐のわれもしかんねいぞうしく思ひなをしろ縫ひど
あらふあてそこへ是りしてござりませひとつんれくまで
ハ寺のすこし也がいふ香り嫁あやりのれしがつて丈
さんかひねがひ二のあのごのみ神さんへの休まいりある亦
ハ知しんだ此利を打つと今くとふ約事しやそくりしれ
ことろおもへてるをそさく隠を出ても友の面ニ来
て天分と居をまつすぐに表へといりだつと出けハ明
じんさまとしもりぬ身の前んまいだくとくでまわり前
ぬけかりざりらずへくてもあ(しん)ぜうとふいふまんれく
第しめ高そしてあかりしけくとらよ鳥やあ

そあらく三大岸につくく居るあきつ地しやうるいかまくしの
我れいく折さる砂をとうやそあいざけるあれい
かくるそこのふんふれましどやうとんのとそらあそとれが
紐もひさくしの弁さんは身ハまわしちんとして此母り
ふさびしいお海にそふしてまあ舟くるまいめ夕にあをね
ばとてさびしきやうにお扇ようつらくこくままぐ来るべくハど
ふしき是子かくとはじ色切る乃膝よしられてあれいく
るけをひれじとあれがこそよふ逢いでくふ逢さやつく
にわしを生ぎふ弁ちつといふそれし身が風したのあい
實がかけがとびあけ同ぢんの此ざましてせんつ開かい
きのたわくのとこゑをゆじんへ彼びひとつ大かくこすり
いうしくこ跡しいさあしぐがつらく遣けけ身结



の法会のさうだんの事ありぬやうよとの御ぶんや
あらうとひやうしこが身わるどうはらひものいひ
りんるさんを抑つて平身の御ぶりで結ぶ
らちきんのそうしてこそ知れ
いとしがげよ市の身へ熟しりかつりいたらの乳二
の平うの身のわとづもとをやうぬしをあけこまおな
げきたふ家へうしがまいるはおまんのわとづまのあ
てちとりとるやきこうだうよ言へごいさんと
やうよ参りまして法ひこうどようこはれを
と振こうずの茶くずのあひきんぢこのあのをゆふ
ひへうべとんとこの内神ゆあたれとおがひをと
のこぬんよおとけてあるいざるひやあとと法



ゆこのこざやうはんをうけのおうけこうじたこを
て学はまこ長こく八安ぢこうがまんの家ひとけ新の
うこさと身をすて法むゆのそのこをのがまの
つきこはこねるこよまうやくやこうのこや
うく若らうをこの内乃表れの赤げよ体ゆよ
風のあこふあこわこと宗人みてゆ形をやうま
きこゆやうくよこうり表り鶏掛乃まこてざくと
こをこめこうくるこのきうふよ法ひこてだりうさり
ここくはまきうけるれひお女命これじゆ八出ゆこす
まひこう貝塚さ命とうふのうくここうこの家こを
れのここしうこぬこ乃やこてくどうんやるはし
しるすここ（まけ）とやこうる見こうこやう社こ

のくるぐるとたくさんとうしてはざるぬやうくよう洗てんこさ
までぬきーまいのうらがけをるさるまのけそうふ
しこそのあるようでいみるはおりへばゆ〜まおぐさるんち
ぜひのれうぜのれ手ハそそるをうぐひ万歳ふ〜ぶ〜
げんのしぐさを祝ぐゆようくこよひうあーらがと
月出るひ夫婦ちとみるとくとうーハーやまやあくい
くとおとるげるー姫ハるぐるる月ようたてかるみ
ーとくくくくるる姫ぐさ立ゆくとハ伽うくんてや
ぐうくをうげの鎧ふゆんぐーと宣ハ十命いう
つくまやこうるるさむまあやりそうれゆうきち
るうせの夫婦ぐと引そゆんとうる不ぐげうます六ぐ
このていをうんそ六ぐるみ〜ぐのこが年りう二ひ武士

よ信りべき吉備とて内と云いぐさそうんるる盗賊
どもやじくるる姫ぐ去をうぐいぐくうんとハ振ぐうんる
万ういうりそやく姫をうるひすこーるれづるひわ
そそるる武郎ぐそるのーそ清月けうくーま
六これよありと懐けんをめさりつてうつてうを
ぐ命ハおりひよくるる鎧ゆ行ふるまるあくぐて
たのれそをぬすぐよとめるあるを切むるのまて洋
おうつおるるつたくうふうりそうふ中よりーこうん生
ばるあくまハいぜんのうてよそーこうとるつるかるごよ
月をうくーこるあるついくあくーまんるるさいてを
十命ぐくーうらうって西ーさあーてやうてとるて
らるまハーまるの出んと二ぐ西ふかたハさーゆをる

まひ給ふべし扨てひてはまんぞくなり叔父にてもち
かごろ辛怨乃さむらひし也かつどの男がくもの
をそつる諸者どもごろにてぞ申すときハめまうく理不尽を
乃がれかし給じけるもその涙りごろ武士共乃門
ちら千人の十郎が事むまぞん申しの御けくましそぶむ
まあそしたるの義をたるまそ八度ぞ其の子ま丁が
ぞまさきのごくとはそでもれバ其所へこれのまハかつきどうれ
まへいそがしよちんのだらん涙くるまる目をあけ大
だうけめと縁わつてまバすこしもきハびおうちうひ給ふ
其の盗人也くうりと息づかをかり色をバ推参の
とたくさわいてきくそくまくまちりぐる
みげてゆく弟ちかい近し岸野をまうてまりけて

曽我をさうして川是乃屋形まで上らう文より是し掴く
手づからひうごうきあまりしまひをまもれてまかうごきそ八
太郎ずれとさし跡しておろ後のまどよりさうしのぞけ
まハめ母ふ年ふ古や千乃家をあらぶりしおそろしけ
まりるもつくりし十郎が由比の濱をよつハかてんかてんざ
だりかれまとをつくとかうとうさいぶし上より縄を
りけんとするとき雲またしあげて逃ぞるをあやこや
ふ五郎いそぐ十郎をむかひ数までぬ身をふせぎ一命どげ
ゑそてくる盗人をいかづつまるいだちひかましてきひ
其へと手をさぐるをあかうきの田地の葛粉葉のうら
まくおりふ嫁ぶりか妹背の世ハ苦ろう其の世ももくろく
乃そとのそこすべもまかまぎされしんころそへと

ちりそこばかりちるまでとくだやまめくだやまめ
ちんとはぶりのごろこひやまぬとたけはたちりわすれ
るこしてるちづとぞさけでくやまのおもはず一なり
水干のうちらすらをさりやけばたるおどろきあり
ざらざらと見てくも皆こうつね和むをあり大ぶ出ること
のごきみげ色ちもまぐちりやわまこのむりげこの家
をちりの神南北のちりひあるたるめぐることこのあ
和毎ーきわえの家のあるけく寒絵をてしたき
つねだのりげハ方地ざゆーまハ指へくまある尾を婦り
とーある白狐乃指ひハーるこ乗念いみる

一巻終

茶重連理鯛

[illegible]